

西真寺通信

令和六年新年号 発行 西真寺

●あなたは「異質なもの」の増殖を許せますか？・臨床死生学の問い・

私に対する「異質なもの」とは、新型コロナウイルスや病原体、環境ホルモンなどの有害物質などが考えられると思います。

人間は「異質なもの」からの侵入を忌み嫌います。生理的に異物を排除することで、身を守るといふ生理的現象が心にも及びます。身を守ることは、一方で偏見や差別の温床になっています。「異質なもの」の「寄生性」が偏見と差別なのです。

新型コロナで亡くなった人の遺体に関わる偏見と差別の眼差しは、周辺の家族にも向けられました。この現象は、死骸に対

する生理的嫌悪と、死に対する恐怖、ウイルスに対する未知なものに対する自己防衛が重なって起きた「寄生性」の連続性を表していたと考えられます。しかし、裏を返せば、いつその「寄生性」が自分に向けられるかどうか、いつ当事者になるかわからない、あるいは立場が逆転するかもしれないという、両価性と脆弱性に溢れています。

現在の私は、甲状腺の癌を患っている立場にいます。母親も同じ部位の癌からの転移に苦しみ、そのまた母親である祖母も同じ部位の癌でした。その祖母は、四十二歳で亡くなりました。私の場合、遺伝もしくは環境による内分泌系の機能の変化が生じた訳ですが、母も祖母も恨むことは出来ません。私が恨めば、次の世代の子どもたちも私を恨むことになるでしょう。

癌細胞は、新生物と言われます。一種の異質な暴走細胞による寄生生物であります。つまり、私の身体の中で免疫系が排除できずに生まれた「異質なもの」

が癌であります。この視点において、自分の身が「異質なもの」に対する排除を許し、私の心が「異質なもの」である癌を受け容れているのです。すなわち、母と祖母を許す限りにおいて、私は既に「異質なもの」の増殖を許す立場にいます。

●あなたが次世代の命を守るために出来ることは何ですか？

世代が代わり、新たなウイルスや新たな環境ホルモンに起因する生活障害が起こることは、人類が「生産」と「生殖」を繰り返す以上、防ぐことが出来ても、免れることは出来ません。

それら「異質なもの」に離れないのが、「偏見」と「差別」という「寄生性」です。もしかしたら、私の子ども達の将来に、

遺伝による癌とはつきりと診断される時代が来るかもしれません。

その場合、子供たちが結婚する際に、その「寄生性」が弊害になって結婚できない場合が予想されます。その位人間は、心身共に「異質なもの」に対する防衛反応を持っていているのです。

仏教が、煩惱による「分別心」（差別心）が人間の苦しみを生むもとであることを説いて二千五百年が経とうとしています。その「寄生性」である「分別心」は、現在もさらに燃え盛っています。私は残りの人生をかけて、自らの「内なる寄生性」（差別と偏見）と向き合いながら、その姿勢を家族に示し、周辺の人々に伝えて行かねばなりません。

その姿勢を確固たるものにする為の「学識」を身に着け、次世代の命に対する「差別」と「偏見」に対応する為の議論を、子ども達や周辺の人々と取り組むこと。これが、今の私に出来る、次世代の命を守る為の伝道的な役割になると思います。

葬儀や法事は何のためにするので
すか 親鸞の思想・生き方から学ぶ
私の問い③

6. 親鸞の「葬儀」を考える

親鸞の葬儀に対する言葉は、

それがし 親鸞 閉眼せば、賀茂
川にいれてあたふべし 『改邪
抄』

とあります。直訳すれば、「私が死
んだら賀茂川の魚に与えてくださ
い」ということになります。しかし
実際には埋葬されています。

仏教の本意は「真実」にあります。
亡き人の本意を通して「真実」を賜
るのが葬儀であります。このこと
は、次の言葉から読み取ることが出
来ます。

誠なるかな、撰取不捨の真言、超
世稀の正法、聞思して思慮するこ
となかれ 『教行信証』 総序)

(訳) 如来の本願が何とまことであ
ることか。おさめ取って捨てる
ことが無いという真実のことばで
ある。この世を超えた、たぐいま
れな法である。この本願のいわれ
を聞いてゆくことが人間の本质に
沿った営みである。

ここで言う人間の本质とはなん
でしょうか？マザーテレサは、「人
間の最大の苦しみは、見捨てられ
ること」と述べています。この、
見捨てられる、人間の本质にある
根本的な苦しみを最も理解してい
るのが阿弥陀如来の本願というこ
とになります。

ここまでの内容では、葬儀や法
事は如来と自分の関係性があると
捉えられ、亡くなった人に対する
供養にふれていません。しかし、
幼い頃に父母と離別した親鸞が父
母を愛しく思わないはずがありま
せん。

親鸞は、

一切の有情はみなもつて世々
生々の父母兄弟なり。いずれも

たすけ候ふべきなり

生きとし生けるもの全てが生

まれば変わり死に変わりを繰り返
し仏に成る限り、父母という対象
は既に仏である。その為親鸞は、
「親鸞は父母の教養のためとて、
一返にてもうしたること、まだ候

はず」と言えるのです。そして、
わがはからいにてはげむ善に
ても候はばこそ、念仏を回向し
て父母をたすけ候はめ

と、自分が念仏で善を積んだとこ
ろで、父母を救い、私が仏にする
訳ではないと言います。補足する
と、念仏とは、特定の対象を定め、
他を排除するものではなく、一切
の有情を救うはたらきである。ゆ
えに念仏とは、わが力で励むべき
善ではない、となります。

我々凡夫がいくら功德を積ん

だところで仏の力に及びません。
その為浄土教では、我々の称名念
仏は、仏様の「五正行」、(読誦・
観察・礼拝・称名・讚嘆供養)つ

莊嚴の一部であるという捉え方
があります。(善導)

この為、私たちから仏さまに善
を差し向ける往相回向ではなく、
仏さまから私たちに差し向けら
れた回向、すなわち還相回向が、
儀式の基本になります。

私たちが善業の功德を積んで、
差し向ける行ではなく、仏を讚
え、お経を読み、仏鏡で自己を觀
察し、御礼の称名念仏を唱えるこ
とで葬儀・法事が勤まる訳です。

竹橋太は『真宗の儀式の前提』
の中で、「儀式は南無阿弥陀仏を
表現したものであって、私たちの
行として、その功德をもとめるも
のではありません。仏の説法、経
典の世界を目に見える形で表現
したもの」と述べています。

儀式は仏の仕事Ⅱ「仏事」と呼

ばれていますので、単なる先祖崇
拝ではないということは明らか
です。故人の死を「縁」とし、仏に
出遭わせて頂くのが葬儀・法事に
なります。

仏の仕事が表現されたお浄土の世界など、空想の世界であり、非現実であるという科学しか信じない方も多くおられると思いますので、仏事の原理を説明します。

7・科学の知と臨床の知

中村雄二郎は、**科学の知の原理**は「客観性」・「論理性」・「普遍性」にあると言います。これは仮説と演繹的な推理と実験によって実証される方法で、医学もこの三つの原理によって発展してきました。ところが、この三つの原理だけでは、心身共に癒されることが分かったのです。

科学の知を補う**臨床の知の原理**が立てられました。この臨床の知は、直感と経験と類推の積み重ねによる知で、「**世界観**」・「**象徴性**」・「**身体性**」の原理を持ちます。

実際に臨床心理学の療法でこの原理を持つ箱庭療法という方法があります。縦五十七センチ、横七

十二センチ、深さ七センチの長方形の箱に半分ほどの砂を敷き詰め、様々なミニチュアの人形やおもちゃを置いていく創造的かつ関係性が成立する療法です。

言葉に表現できない内的体験により、「**内なる治療者**」（自然発生的な自己治癒力）を活性化させる過程が可能になるのです。写真左の河合隼雄が日本に初めて箱庭療法を導入しました。中村は、河合との関わりの中で、「臨床の知」の重要性を説いた訳です。



この原理を仏事の莊嚴に置き換えると、「**世界観**」||浄土・「**象徴性**」||阿弥陀仏・「**身体性**」||念仏ということになります。この三つの原理を持つ内的体験によって、我々は、仏との関係性による「**内なる治療者**」を活性化する

過程を得ると考えられる訳です。

親鸞にとつての「**内なる治療者**」は、「**自然法爾**」という言葉で表現されています。

自然といふは 自はおのづからといふ 行者のはからひにあらず然といふは しからしむといふことばなり

しからしむといふは 行者のはからひにあらず 如来のちかひにてあるがゆゑに**法爾**といふ法爾といふは この如来の御ちかひなるがゆゑに しからしむるを法爾といふなり (中略)

弥陀仏は 自然のやうをしらせん **料**(りよう・手段)なり。

『末灯鈔』

仏の仕事である、浄土の莊嚴による三つの原理は、自らのはからいではなく、阿弥陀仏の示したはからいである。阿弥陀仏はそのはたらきを伝えるための象徴(料)であるという領解ができます。

信楽峻磨によれば、「やう」は様子の「様」であり、内実や様態を指し、料は、方法や手段を指し象徴であると論じています。その上で、

阿弥陀仏とは、その真理、道理を、私たちに知らせるための象徴であり指だということです

阿弥陀仏を実体として捉えるとおとぎ話になります。象徴として捉えると、私たちの内的な体験や目覚めをもたらすための原理として理解することが出来ます。この領解は、これまでの伝統的解釈である阿弥陀仏と異なり、実際に内的体験を知る人しか腑に落ちない「**臨床の知**」における「**象徴**」の原理なのです。

ただやみくもに念仏せよ、阿弥陀仏に全てお任せすればよいという盲目的な他力信仰理解においては、全く現代社会に通じません。念仏とは、「お任せするおとぎ話」ではなく「科学の知」を補う原理を示す仏の仕事なのです。

8・まとめ

ある浄土真宗仏光寺派の僧侶は、「通夜はその人の人生の卒業式、葬儀は仏門に入る為の入学式、法事は同窓会である」と言いました。縁のあった人々の、死と再生のイニシエーションに感謝の思いでお参りをさせて頂く、ご縁の重要性をこの表現は、うまく言い当てています。

私にとっての法要とは、亡くなった人々の想いを聞いて往く、お浄土にいるその諸仏（おおいなるいのち）からの願いを受け止めて確かめ、相続して往くことです。亡き人と出遭い続ける聴聞の場が法要であり、仏との出遭いです。

そして、我々が仏と出遭う為の仏の仕事が仏事であり、私たちが僧侶は、仏の仕事を助け、そのご縁に感謝しつつ、つながりを確かめる為の助業を勤めとするのであります。皆さんはどのように葬儀や法事をとらえていますか？（終わり）

●「つながりだけでは何も解決しない」生命倫理学の問い①

私の大学の先生である森岡正博先生は、「すべては他のすべてとつながっている」という世界観は、近代以前に西洋でも東洋でもあった考えであると述べました。

近代のユングは、個人的無意識（フロイトの説く無意識）のさらに深い層に普遍的無意識（集合的無意識）があることを仮定しました。これは、人間の内なる自然である小宇宙的世界の最も深淵な層に、外なる自然である大宇宙とのつながりがあることを肯定したものです。

河合隼雄は、普遍的無意識を「個人的ではなく、人類に、むしろ動物にさえ普遍的なもので、個人の心の真の基礎である」と説明しています。

仏教であれば華嚴の「一即多」という世界観に成ると思います。一が大いなる大宇宙の原理であれば、多は、小宇宙である人間の

なる世界で、様々な細胞から成り立つ多元的原理を意味します。小宇宙の分別の原理が、無限に広がる無分別な大宇宙とながっているという世界観です。

森岡先生のつながっているだけでは何の解決にもならないという指摘は、「多」（分別）の世界において「一」（無分別）という世界を知らないことを説明していると思います。人間は、自己の内なる深淵世界を知らなくまま、外なる世界である自然を支配しようとして、コントロール能力を既に失っている訳です。

つながること、そのものは人間を癒し、孤立させないで人間の心を安定させてきたのは確かです。近代以降科学が発展し、何を失ってきたのかを考える、河合隼雄が指摘した「関係性の欠如」がその一つとして説明できます。

エンカウンターグループ（自己理解法）、ピアカウンセリン

また箱庭療法を作成しているクライエントには必ず傍にいるカウンセラーとの関係が重要であり、内観療法の同行者も無くてはならない内なる変容に必要な存在です。ここでは、単なりつながりというよりは、「相互」につながり合う関係性が解決につながるようになります。

一方で人間が人間にしてきたことと、人間が自然環境や他の生命体にしてきたことはよく似ていると森岡先生は述べています。人間の内なる深淵は矛盾だらけで、両価性は否定できない人間の**本質（真の基礎・河合隼雄）**であります。

絶対的な矛盾を抱えたままの自己を認め、受け容れ知ることが「足るを知る」、すなわち自己の全体性を生きることにつながるのではないかと思います。

絶対矛盾的自己同一とは、西田幾多郎の生命に対する概念でありますが、生きとし生けるものを犠牲にしなければ人間は生きていけないという、「相反」する生命依存の在り方も示していると考えられます。（次号に続く）